様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 １４ 日現在

機関番号：３２６８２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ０２５７８

研究課題名（和文）『今昔物語集』を中心とするパラレルコーパス作成による平安語彙の層状構造の解明

研究課題名（英文）A Study of Stylistic Layer of Lexicon in Heian Period Japanese Based on Compilation of Parallel Corpus of Konjaku Monogatarishu

研究代表者
田中　牧郎（TANAKA, Makiro）

明治大学・国際日本学部・専任教授

研究者番号：９０２１７０７６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,800,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は、平安時代の語彙に文体的な層状構造が存し、その文体的な層は、意味的な層に基づくことを解明することを目指す。
　まず、『今昔物語集』と和文資料及び漢文資料とのパラレルコーパスを作成し、相互で対応することが多い語の対を抽出することで、語彙を3つの層に分けることができた。また、『日本語歴史コーパス』なども用いることで、平安時代の語彙には、５段階の文体的な層を確認することもできた。これらの各層間で対立する語の意味・用法を分析すると、そこに意味的な対立を認めることができた。
　これらのことから、文体的な層状構造は、意味的な構造に基づいていると考えることができた。

研究成果の概要（英文）：This study aims to describe the stylistic layer of lexicon in Heian period Japanese, and prove that the layer is based on semantic structure.
We first tokenized tales sharing the same origin within Konjaku Monogatarishu and Wabun materials, and Konjaku Monogatarishu and Kanbun materials, from which we then compiled a parallel corpora. After extracting words having a high ratio of corresponding word types in the parallel corpora, we were able to classify into three stylistic layer. Moreover,we were able to confirm five levels stylistic layers of lexicon in Heian period Japanese, by investigating Corpus of Historical Japanese. Through analyzing the meaning and usage of the word pairs, we clarified that they show semantic distinguish between the words in each layers.
From these facts, it was possible to think that the stylistic layered structure is based on a semantic structure.

研究分野：日本語学

キーワード：日本語史　語彙　文体　コーパス

１．研究開始当初の背景

築島裕（1963）『平安時代の漢文訓読語につきての研究』以来、定説となってきた、平安時代の語彙における漢文訓読語と和文語の「二形対立」（「互ひに」／「かたみに」など）については、その存在理由が、文体の違いに基づくということ以上の説明がなされておらず、語彙論として不十分なものにとどまっていた。

また、築島（1963）が見出した「二形対立」は、漢文訓読的な性格が極めて強い訓点資料に特有の語彙と、和文的な性格が極めて強い和文資料の語彙との間の、言わば両極の語彙での対立であったが、平安時代には、和化漢文資料や和漢混淆文資料など、その両極の間にも多くの資料があり、それらを考察の対象に加えれば、文体からみた語彙のありようは、異なる様相を示すのではないかと考えられる。それは、文体的に幾重かの段階差を持つ層状構造をなすのではないかと予想される。

２．研究の目的

本研究では、漢文訓読語と和文語の両極の間に層をなすと予想される、平安時代日本語語彙の層状構造と、その層状構造の背景には、類義語群の意味構造があることを明らかにすることを目的とする。

そのことを証明する手段として、まず、『今昔物語集』を中心とした、漢文資料（和化漢文資料を含む）、和文資料、和漢混淆文資料のパラレルコーパスを作成して、相互の語の対応を網羅的に調査する方法を採る。また、パラレルコーパスが作成できるのは、一部の資料に限られるので、他の重要資料をコーパス化したり、既存のコーパスを用いたりしながら、文体的な層状構造の記述と、その背景にある意味構造を解明することを目指す。

具体的には、築島の言う「二形対立」は、その層状構造の両極を見たものであること、層状構造全般にわたって、語の文体的な対立が幅広く存在すること、その対立は意味の対立に支えられていることなどを示す。

３．研究の方法

（1）和文資料とのパラレルコーパス作成

日本語史上、はじめての本格的な和漢混淆文資料とされる『今昔物語集』は、和文資料と漢文資料（中国漢文および和化漢文）の多くを依拠資料として撰述されている。そのうち、和文で書かれた『宇治拾遺物語』を取り上げ、『今昔物語集』のテキストと『宇治拾遺物語』のテキストとを、文単位、語単位で対応付ける方法を研究する。その方法が確立した後、『今昔物語集』と『宇治拾遺物語』とのパラレルコーパスを作成する。

（2）漢文資料とのパラレルコーパス作成

『今昔物語集』の依拠資料のうち、漢文（中国漢文および和化漢文）で書かれた『冥報記』『日本霊異記』『法華験記』を取り上げ、『今昔物語集』のテキストと依拠資料のテキストとを、文単位、語単位で対応付ける方法を研究する。その方法が確立した後、この３つの依拠資料と『今昔物語集』との間のパラレルコーパスを作成する。

（3）漢文系資料のコーパス作成

平安時代の日本語資料については、和文系資料のコーパス化は、国立国語研究所によって進められたが、もう一つの重要な系統である漢文系資料（和漢混淆文資料を含む）については、『今昔物語集』を除いて、ほとんどコーパス化が行われていない。そこで、重要資料のいくつかをコーパス化する方法の研究を行い、その一部について、コーパス作成を実施する。具体的には、『法華百座聞書抄』と『尾張国解文』の２つの資料をコーパス化する。

（4）コーパスを使った語彙の層状構造とその背景の研究

上記(1)(2)(3)の方法で作成したコーパスと、国立国語研究所編『日本語歴史コーパス平安時代編』、『同　鎌倉時代編』を主たる資料として、平安時代の語彙の層状構造とその背景を解明する研究を行う。

この研究は、２つの段階で行う。第１段階は、パラレルコーパスにおける語の対応状況の調査や、文体の異なる資料間の語彙頻度の比較調査などによって、文体から見た語彙の層状構造の記述である。第２段階は、層状構造をなすことが確かめられた類義語群を取り上げて、意味・用法を詳細に分析し、層状構造の背景にある意味構造の記述である。

４．研究成果

「3. 研究の方法」に記した 4 点それぞれについては、次のような成果が得られた。

(1)『今昔物語集』と『宇治拾遺物語』との同文説話約 80 話について、パラレルコーパスを作成し、文のレベル、語のレベルで対応付けを行い。語のレベルの対応付けデータをもとに、「同語対応」「異語対応」「非対応」に３分類し、このうち「異語対応」については、対応する語の対をリスト化した。

(2)『今昔物語集』と漢文の依拠資料との文と語の対応付けの方法を検討したが、漢文の場合、日本語としての読み方が複数想定される場合があることから、(1)の場合よりも「対応」と認定する範囲を広く取ることとした。その上で、『今昔物語集』が『冥報記』『日本霊異記』『法華験記』を依拠資料とする説話のうち、約 80 話について、『今昔物語集』と依拠説話とのパラレルコーパスを作成し、「同語対応」「異語対応」「非対応」に３分類し、このうち「異語対応」について、対応する語の対をリスト化した。

(3)『法華百座聞書抄』は、法談の場で語られた説話を記録した和漢混交文資料であり、文体的に『今昔物語集』に近い位置にあり、文体的な語彙の層状構造を研究する資料として適していると考えられる。本資料はコーパス化が完了し、近いうちに、公開する予定である。『尾張国解文』は、和化漢文資料でありながら訓点が付与されており、読み下すことが可能な資料として、コーパス化に適している。そのコーパス化を試行し、訓点情報の電子化方法などを検討し、コーパス作成を80%程度まで行った。

(4)語彙の層状構造の研究については、①語彙総体の研究と、②個別語彙の研究すなわち語誌研究とに分けて、成果をまとめる。

①語彙総体の研究については、パラレルコーパスの語彙分析から、次のような見通しが得られた。

まず、『今昔物語集』と『宇治拾遺物語』との間では、例えば、次のような文体的対立の対が得られた。

間／程、時／折、大夫／守、聖人／聖、女房／御許、来たる／来、奉る／参らす、与ふ／取らす、極めて／いみじく、暫く／暫し、いよいよ／いとど、む／むず、如し／様なり　ほか

『今昔物語集』と漢文依拠資料からは、例えば、次のような文体的対立の対が得られた。

禅師／菩薩、大徳／菩薩、受く／請ず、生む／産する、置く／安置、得（う）／能ふ、坐す／ます、即ち／忽ち

『今昔物語集』と『宇治拾遺物語』との間の対立は、中間層と和の層との対立、『今昔物語集』と漢文依拠資料との間の対立は、中間層と漢の層との対立を、それぞれ基本とし、頻度比の大小に応じて、各層は和漢の両極の間をシフトすると見ることができる。

また、漢文訓読体の文章と和文体の文章の語彙比較の方法から、次のような文体的対立の対が得られた。

しるし／かひ、もろもろ／よろづ、なんぢ／おのれ、女人／をんな、父母／おや)、僧／法師、大臣（だいじん）／おとど（大臣)、ます／います・おはす、あやしむ／あやし、奇異／あさまし、たちまち／きと

これらは、漢の層と和の層の対立であるが、ほかに、相互の文章の頻度比が小さな対立を見せる対も見られ、それらは、和または漢の層と中間層との対立とみられる。

以上のことから、漢の層、中間層、和の層の３層構造を基本として、それぞれの間にある層も含め、５層構造をなしていると見ることができた。

②語誌研究としては、「しるし」「かひ」、「もろもろ」「よろづ」を例に、その意味用法の詳細な分析を行って、その対立が文体的対立と密接に関連することを明らかにした。例えば、後者の対については、次のようなことが明らかになった。

- 「もろもろ」と「よろづ」は、意味・用法の共通性を持ち、また、漢文訓読語か和文語かの文体的な対立関係を持つ。
- 「よろづ」の方が用法の幅が広く、特に、和文で広い。『今昔物語集』は、和文の「よろづ」の用法の一部を受け継ぎ、その用法に「もろもろ」を用いることもある。
- 同じ用法で「もろもろ」と「よろづ」を併用している『今昔』においては、意味・用法の細部で、両語が対立的に使い分けられている。
- 「もろもろ」と「よろづ」の文体的対立と、意味・用法の対立とは連動しており、和文と『今昔物語集』との、出現頻度や意味・用法の差異は、その対立のありようから説明される。

「かひ」と「しるし」においても、意味・用法において、多くの対立点が指摘できた。

文体的対立を持つ他の多くの対においても、意味・用法上の対立が見られることが予想され、文体的対立と意味的対立は、関連し合っていると考えられる。その対立は段階的な層を成しており、それが、平安時代語彙の層状構造であると考えることができる。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計４件）

田中牧郎、平安時代の「もろもろ」と「よろづ」―コーパスによる語誌研究―、歴史言語学の射程、査読無、2018、ページ未定

田中牧郎、平安時代の「しるし」と「かひ」―コーパスを用いた語誌研究―、国語と国文学、査読無、93 巻、2016、42-58

田中牧郎、語種、講座　言語研究の革新と継承１　日本語語彙論Ⅰ、査読無、2016、241-274

田中牧郎、『今昔物語集』に見る文体による語の対立―本朝仏法部と本朝世俗部の語彙比較―、コーパスと日本語史研究（ひつじ書房)、査読無、2015、119-148

〔学会発表〕（計３件）

田中草大・鴻野知暁・田中牧郎、『尾張国解文』正中二年点のコーパス化とその可能性、第 117 回訓点語学会研究発表会、2017、東京大学

鴻野友暁、複合動詞「Ｖ＋暮らす」と「Ｖ＋暮る」について―項構造を中心に―、第 117 回国語語彙史研究会、2017、近畿大学

田中牧郎、平安時代の「もろもろ」と「よろづ」―コーパスによる語誌研究―、「通時コーパス」シンポジウム 2017、2017、国立国語

研究所

６．研究組織

(1)研究代表者

田中牧郎（TANAKA Makiro）
明治大学・国際日本学部・専任教授
研究者番号：90217076

(2)研究分担者

鴻野友暁（KONO Tomoaki）
東京大学・大学院総合文化研究科・助教
研究者番号：30751515

田中草大（TANAKA Sota）
東京大学・大学院大学院人文社会系研究科
（文学部）・助教
研究者番号：20778758